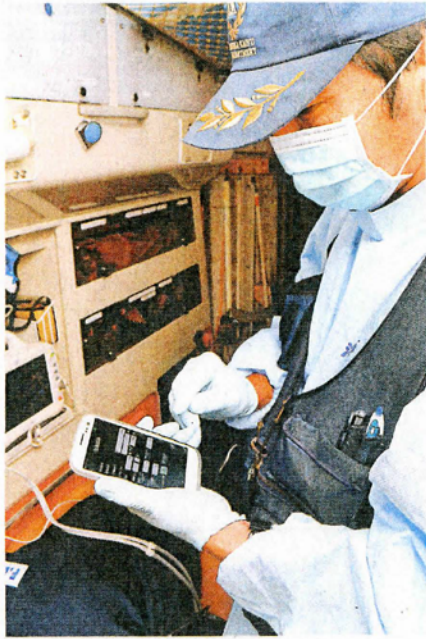


スマホで患者情報共有

救急車から 医師の判断迅速化 画像送信

海部病院と消防組合

救急搬送中の患者の画像情報を病院にいち早く知らせることで救命率を高めようと、県立海部病院（牟岐町中村）と海部消防組合などは9日、スマートフォン（多機能携帯電話）を使った情報共有を始めた。搬送者の情報は電話を使い口頭で伝えられているが、医師は画像によってより詳しい状況把握が可能に。患者の病院到着までに症状診断ができ、的確な受け入れ態勢を整えることが期待される。初日は運用する事案がなかった。



スマホを使った患者の画像データ送信を確認する救命士＝牟岐町川長の海部消防組合消防本部

スマホは海部消防組合本部（牟岐町川長）と日和佐、海南両出張所、高知県東洋町にある室戸市消防本部東洋出張所の計4カ所に1台ずつ配備した。救命士が救急車内で心電図や心拍数のほか、患者の表情や患部、事故現場の様子などを撮影し、専用回線でデータを病院へ届ける。

海部病院では、医師が専用のスマホで画像データを受信。救命士に薬剤投与や、より高度な病院への転送が必要

かどうかなどの指示を送るこうした判断が、従来に増える確、迅速にできる効果見込めるという。

海部消防組合によると管の救急患者搬送時間は平均分だが、山間部では30分以上のケースも少なくない口頭のやりとりだけでは搬送先の確な情報をつかむまでのロスが生じるほか、防と病院で重傷か否かの判断が異なるギャップもあった情報共有システムは、徳大学病院地域脳神経外科診療部がこうした状況を解消しようと開発した、スマホによる「遠隔地医療支援ネットワーク」を活用した。海部消防組合の畦内吉郎消防本部長（67）は「救急隊と病院にとって命は第一。成果や課題を検しながら有効なシステムにしたい」と話した。

（土井良典